

文化映画 紹介

渡部実

「火災・煙・有毒ガス」 映学社作品

「JAPAN SCOPE」 TUGBOAT=電通テック作品

火災・煙・有毒ガス
検証 新宿歌舞伎町
ビル火災

「スタッフ」製作・演出／高木裕己 プロデューサー／篠原修 脚本／高木裕己、加藤有芳 撮影／森隆吉、録音／沢畑明 選曲／柏瀬紀代隆 CG製作／小嶋宏幸、高橋誠哉 ナレーター／中里雅子 監修／東京大学大学院工学系教授（工学博士）・菅原進一 日本医科大学法医学教室教授（医学博士）・大野曜吉 協力／日本医科大学法医学教室、国立国際医療センター、独立行政法人・消防研究所、東京消防庁、田園調布消防署、神戸市須磨消防署 資料提供／大阪市消防局 完成／02年 ビデオ作品・22分

「内容」近年、都会で起こった火事としては、2001年に東京・新宿歌舞伎町で発生した雑居ビル火災が記憶に新しい。都心の密集

地で起こったこの火事は44人もの犠牲者を出す大惨事となった。本編はその大惨事の第一の原因となったもの——煙と有毒ガスの脅威、特に一酸化炭素中毒の猛威を検証した作品である。

火災というものは様々な形をとる場合があり、素人の単純な知識としては火傷死などのケースが挙げられよう。だが、この作品を見ると火災の認識が変わる。それは新宿歌舞伎町の火災によって発生した一酸化炭素中毒である。私たち一般人は一酸化炭素中毒というものと言葉の上でしか知り得ていない。

もともと、火災が起こると炭素を含んだものが燃えて、空気中の酸素と結合して二酸化炭素となる。ところが、空気中の酸素量が多分な状態で炭素が増加すると酸素は2つに分かれ、それぞれが炭素と結合し一酸化炭素となる。一酸化炭素は無色無臭の気体である。それが火災と共に多量に発

生する。そこで画面は一酸化炭素をマウスに吸わせてみる様子を紹介する。10秒後、マウスの体に異変が起こり中毒症状が現れる。30秒後、マウスの体はマヒして動かなくなる。そしてそのまま死に至る。恐ろしい映像である。一酸化炭素は酸素に比べて実に200倍以上の力で体内の酸素を運ぶ赤血球と結び付いてしまう。そのようになると脳細胞にも十分に酸素が送られなくなってしまう。歌舞伎町のビル火災では多くの犠牲者に脱出の跡が見られなかったという。これは既に一酸化炭素を吸って中毒になった人たちが脳細胞を攻撃され、その場に倒れてしまったことを意味している。一酸化炭素中毒は火よりも速く人間を襲い、逃げる力を奪ってしまうのだ。

映画はその他にも雑居ビルの模型を使っている煙の実験——階段やエレベーターなどの縦穴を煙が一気に上昇していく実験などを紹介



「JAPAN SCOPE」



「火災・煙・有毒ガス」

し、特に気密性の高い場所での火災と一酸化炭素中毒の脅威を訴えていく。図式での説明も懇切で分かりやすい。あらためて、火災の恐ろしさを知り得る一編である。(問合せ先：映学社 TEL03・3359・9729)

JAPAN SCOPE 日本の17歳から

「スタッフ」製作総指揮／岡康道、TUGBOATプロデューサー／高橋大構成・演出／加瀬泰 撮影／鈴木守、吉澤拓広 音楽／若林美希 製作進行／矢野慶一、田中麻子 企画／外務省 完成／02年 ビデオ作品・27分

「内容」日韓ワールドカップも終了し、開催期間中は日本全国がその熱狂に包まれた。世論の中にはサッカーひとつで何もそこまでの大騒ぎをしなくても良いという醒めた意見も見られたが、ただひとつ、今回のワ

ールドカップは日韓共同の開催ということもあり、日本と韓国の若者がそのことを通じて連帯感を持ち始めたという現象は新鮮なものとして映った。近年、韓国では日本文化の開放政策がとられており、それに応えた日本の若者も積極的に韓国の文化、国民性を理解し始めていくようである。

この作品は韓国に限らず、そのような自国の文化発信の前衛に立っている日本の若者、とりわけ17歳の男女の生活を記録し、紹介すること、広くアジア太平洋諸国に向けて日本の現状を伝える広報的な意味合いを持って製作された。

本編に登場するのは、3人の17歳の日本の若者たちである。まず、小平健二さん。健二さんは10代の半ばより競馬学校に通い、乗馬の基礎を身につけた。普通であれば高校へ行くべきところを競馬で自分を試したのである。健二さんの意志は言葉より実際に彼の乗馬姿に

託されている。乗馬では落馬もある。それは危険な仕事であるけれど、ここに黙々と乗馬を続け、大地に足がついたような健二さんの騎手としての決意も感じられる。彼は秋に競馬学校を卒業して故郷の北海道で念願の騎手デビューを果たす。

次に登場するのは、山里理沙さん。理沙さんは沖繩の人である。理沙さんは高校に通いながら、伝統的な琉球舞踊を学んでいて、将来の夢はその家元を目指すことという。舞踊に臨む理沙さんの立ち居振る舞いは堂々としている。小平健二さんもそうであるが、理沙さんも一見して実際に本人たちに年齢を聞かなければ

その実年齢は想像つかない。騎手でも舞踊でもそこに一途に取り組んでいる人たちの姿には、既に本人たちもその道の専門家という意識があり、その世界の住人という印象が強い。一般的な見方から17歳という実年齢を想像することが難しいの

である。

最後に登場する加藤美央さんは東京を舞台にショー・ビジネスの世界で活躍をしている。あどけなさの残る美央さんは意外にもしっかりとした自分の信条を語る。ご本人の容姿と思考のアンバランスが印象的だ。

この加藤美央さんから17歳という年齢を的確に指摘することはもはや困難であろう。それは加藤さんだけでなく、小平健二さん、山里理沙さんにも言えることだ。一見すると日本の若者は何を考えて、何を行動に移したいのかわからない場合が多いように思われる。その点、この作品は、登場する3人の若者ひとりひとりに冷静な距離感を持って取材し、本人たちの言葉と行為・行動の一致を自然のままに見出ししている。今の日本の若者を取材し、理解と好感の持てる作品である。(問合せ先：電通テック TEL03・5551・8888)

8)